



特集

最先端の職業教育で学生の心をつかむ！

Society5.0時代が実現しつつある近年、AIやIoT、ビッグデータの活用等、デジタル技術の革新は目覚ましいものがあります。既に企業や医療現場等においては、VRやAR等の先端技術を活用した実践・スタッフ教育が行われています。一方、初等・中等教育においては既知の通り2019年よりスタートした「GIGAスクール構想」によって、コロナ禍の影響も相まってICT環境の整備が急速に進み、今後様々な先端技術の普及・活用が見込まれています（下図）。

先端技術の機能に応じた効果的な活用の在り方

遠隔・オンライン教育

- 効果
学習の場を広げる、学習機会の確保
- 留意点
受給側の子供たちへの配慮など



AR・VR

- 効果
調べ学習等への効果的活用（AR）
疑似体験による効果的な指導（VR）
- 留意点
機器操作中の事故に留意等



AIを活用したドリル

- 効果
習熟度に応じた学習、自動採点による教師の負担軽減
- 留意点
学習分野、使う場面に限定



統合型校務支援システム

- 効果
蓄積した情報による書類作成の負担軽減、情報共有によるきめ細やかな指導
- 留意点
システム活用を前提とした業務改訂が必要



デジタル教科書・教材

- 効果
動画・アニメーション等の活用による興味・関心の喚起
- 留意点
効果的な授業への組み込み



協働学習支援ツール

- 効果
個々の状況に応じた声かけ等子供同士の考えの比較・議論活性化
- 留意点
アクセス集中に対応する代替案の用意



出所：【概要】新時代の学びを支える先端技術活用推進方策（最終まとめ）
文部科学省 令和元年6月25日

前号の特集でも取り上げた、「イマドキ学生」の特性にあわせた教育方法にも通じますが、このような教育を受けて進学してくる次世代の学生に対して、職業教育は何を提供できるでしょうか。

文部科学省は、専修学校においても職業人材の養成機能の強化・充実を目指す必要があるとし、実践的な教育を支える実習授業等に先端技術を活用することを目的に、その方策を研究・実証する「専修学校における先端技術利活用実証研究」事業を2020年度からスタートさせています。建築・スポーツ・美容・観光・調理・看護・医療等の分野の専門学校がプロジェクトに参画し、実証研究を重ねています。

その他、事例としてはまだ少ないものの、スマートグラスを活用した実習教育を独自に進めている専門学校や、一人ひとりの進度に合わせた学習を可能にするアダプティブラーニング用のICT教材（対話型のレクチャー機能やAI搭載のドリル等の機能を備えた教材）の導入により、学生の基礎学力の底上げに取り組んでいる専門学校等もあります。

実践力を備えた専門職業人の養成をミッションとする専修学校が目指すべき次世代教育とは？実装化が期待されるプロジェクトの取り組みを紹介します。

（編集部）

第23号の掲載内容

特集	1	最先端の職業教育で学生の心をつかむ！
	2	最先端の職業教育で学生の心をつかめ！～VR・XR教育が職業教育の未来を変える～ 学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター 研究員 小林 英一・渡邊 みどり
連載	4	第13回 学生も教員も楽しくなるアクティブラーニング授業を考える・・・ 「学生も教員も楽しめる授業が基本」 楽しめる授業を創って行くのが教員の仕事 学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター センター長 川廷 宗之
報告	6	第19回公開研究会 開催報告 様々な状況に置かれた女性の幸せの実現に向けて ～教育界、産業界、社会が、今できること～ 学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター
お知らせ	7	ダイバーシティマイスター養成講座 ホームページ開設！
お知らせ	8	2つの研究事業..社会実装化へ ～令和4年度文部科学省委託事業 成果報告会 開催案内～
報告	9	敬心学園 第19回職業教育研究集会（旧学術研究会）開催報告 学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター
告知・募集	12	「敬心・研究ジャーナル」第7巻第1号（2023.6月末発行）投稿募集／次号告知

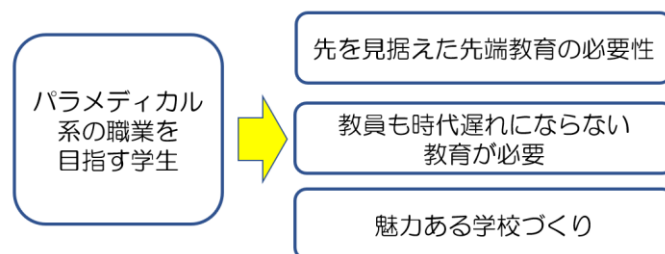
特集

最先端の職業教育で学生の心をつかめ！ ～VR・XR教育が職業教育の未来を変える～

職業教育研究開発センター研究員 小林 英一・渡邊みどり

厚生労働省がまとめた「働き方の未来2035」では、20年後（2035年）の技術や社会、働き方、制度がどう変化するかという考察と、そのうえで「一人ひとりが輝く社会をつくる」ためにすべきことは何かを提言している。その中で、AIをはじめとした科学技術が大きく発展すると報告している。このような変化の中で、敬心学園 職業教育研究開発センターでは、文部科学省より委託を受け、2020年度から「専修学校における先端技術活用実証研究」をスタート。専門職になりたいという夢を持った学生たちの学びに「VR（Virtual Reality・仮想現実）」を導入した教育プログラムの開発に着手し、全国の高等学校、専門学校への社会実装に取り組んでいる。

図1 働き方の未来2035年に向けての職業教育の役割



作図：著者

なぜ、このような研究が職業教育に必要なのか？

この取り組みが、職業教育に必要な背景は大きく分けて2つある。（※図1）

1. 先を見据えた現場に合わせた

先取り教育の必要性

臨床医療の現場では、人体の3次元情報をVRで再現/活用した術前のシミュレーションや最先端の外科手術の術式をすでに取り入れている。一方、職業教育では、現場の状況に合わせた教育が十分であるとは言えない。今、我々専修学校が取り組むべきことは、現場に求められる先端技術を用いた教育を取り入れ、卒後即戦力となりうる人材を育成することである。またそれに対応できる教員に対する教育も必要と考える。

2. パラメディカル系職業を目指すの学生のための
魅力ある学校改革の必要性

GIGAスクール教育を受けて入学してくる近未来の学生に対しては、それに接続する教育を継続しなければ、学習そのものへの興味・関心を失う可能性が大きい。そのためには、卒後のモチベーション維持も意識した、学生を惹きつけられる魅力ある学校づくりへの改革が不可欠である。先端技術を用いた教育により、学生は、教育への期待も高まり実践力のある専門職になりたいという志をより高く持てるのではないかな。

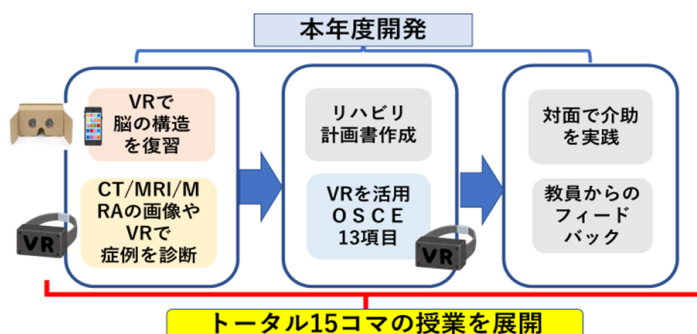
以上のことから、技術や社会、働き方、制度が変化している時代の中、職業教育も時代に沿った教育を行う必要性が大いにあると考える。

開発した教育プログラムの最大の特徴

昨年、一昨年の実態調査を基に、近未来の医療・リハビリを見据えたVRコンテンツを開発した。加えて教員が活用できるコマシラバス・教材を提供するとともに、普段の授業の中で言葉では伝えにくい知識や技術をVRで学習する教育プログラムも開発した。本年度は、VRのコンテンツを増やし、医療・リハビリ分野では、患者のレントゲン画像取り入れた症例検討を取り入れ、最終的に専門学校生用に実践教育プログラムパッケージを完成させた。（※図2）

図2 近未来を想定した実践教育プログラム

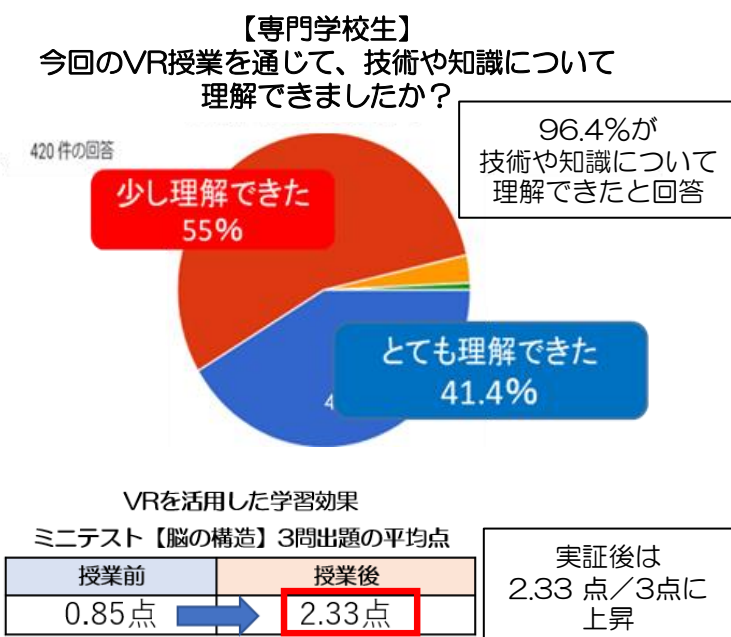
教育プログラム名	プログラムの特徴
実践教育プログラム 15コマ	段ボールで組み立てが可能なスマートフォン専用のVRゴーグルやXRゴーグルを使用し、教員が言葉では伝えにくい臓器の構造について、ARで臓器の3Dモデルを正確に把握することができる。
	脳梗塞の患者のCT/MRI/MRAの画像を読み取り、障害のある部位を読み取る学習ができる。
	3Dで再現された検査・治療の手順シミュレーションをVRゴーグルで体験することで、習得が困難な手順を個々のペースで繰り返し学習することができる。



実際の効果はどれくらいあったのか？

2022年12月中旬までの効果検証により、開発した教育プログラムの有効性が確認できている（全国の専門学校 計9校、対象者は、専門学校生432名）。96.4%の学生が【今回のVRを活用した授業を通じて技術、知識について理解できた】と回答、また、習得した知識・技能の評価についてミニテストを実施した結果、平均点が実証前0.85点に比べ実証後は2.33点に上昇している。

上記の結果から、VRを活用した教育プログラムの教育効果は明らかになり、有効的な新しい学習ツールになることが期待される。



先端技術を活用した教育の課題

1. 先端技術導入に対する受け入れ側の体制

実証研究を通して、先駆的に取り組もうとする学校とそうでない学校との差が感じられた。新しいものへの着手に抵抗を示すことはどの業界でも一定程度はある。一部の教員が受け入れでも、学校全体として先端的な学習ツールを受け入れなければ、組織的な広がりがない。やはり、先駆的な教育に取り組む学校としてのコンセンサスをつくり、組織全体で取り組むことが必要と考える。

2. 授業内容×先端技術のミスマッチの防止

どんなに良い学習ツールがあっても、授業内容とのミスマッチが起きると、それを持続的に活用できなくなる可能性がある。先端技術を取り入れている専門学校の事例検証を引き続き行い、活用効果の高い事例を増やしていく必要がある。

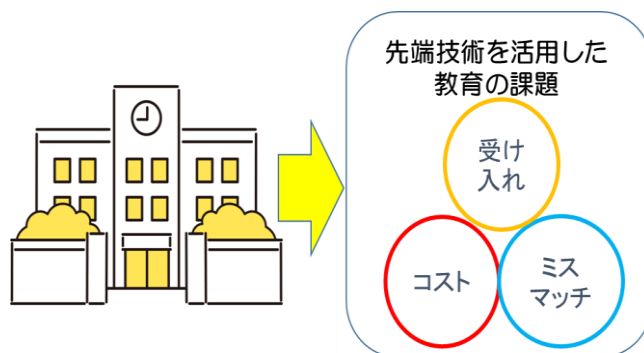
3. 先端機器を導入しやすいコストシステムの構築

さらに、機器導入のコストに関しても、学校側が負担しやすいシステムを構築することで、地域における教育格差をなくし、全国で共通の教育を提供することが可能になると考える。

今後ますます、AIをはじめとした科学技術が大きく発展していく社会の中で、職業教育を行う学校として、先端技術を活用した教育に、学校全体で取り組む必要があると考える。

時代に合わせた教育の見直しこそ、魅力ある学校づくりと未来に向けた職業教育の構築につながるだろう。

図3：先端技術を活用した教育の課題



作図：著者

社会実装をいかに進めるか

現在、実装化に向けての準備を進めている。また、これまでの検証とコロナ禍による学習環境課題を踏まえ、医療・リハビリ以外の分野でもVRを活用した新しい学習ツールの利活用効果が高いと想定し、横展開も検討している。

職業教育の更なる発展のために、今後も研究を継続していく所存である。

他の分野での横展開の可能性

- 遠隔授業・自宅学習で行う場合に活用が可能
- 教育の地域格差をなくし、共通の教育が提供できる
- 臨床実習前に現場慣れする場合に活用が可能
- 臨床実習後のフォローアップ授業に活用可能

連載

第13回 学生も教員も楽しくなるアクティブラーニング授業を考える・・・

「学生も教員も楽しめる授業が基本」

楽しめる授業を創って行くのが教員の仕事

学生も教員も楽しくなる授業

前回では、「学生も教員も楽しくなるアクティブラーニング授業を考える」のコーナーで、学生が教材を活用して学ぶアクティブラーニングの重要性とそのため求められる周到な計画について触れた。

この連載で、この後、授業設計やシラバスの作り方など、いろいろな形で系統的に触れていくことも可能である。しかし、それについては、「学生も教員も共に楽しめる教育法入門」（職業教育研究開発推進機構・刊）として別の著書にまとめている。そこでは、アクティブラーニングの授業を前提に、授業の組み立て方について授業設計、シラバス、授業案、教材の作り方、教員と学生との関係などについて具体的に細かくまとめているので、参照いただきたい。

学生が楽しく学ぶのが基本課題

「授業」は参加する学生にとって（教員にとっても）楽しくなければならない。もちろん「楽しい」というのは、{楽（らく）な、安易な}という意味ではなく、その授業で自分の成長を実感できるという意味の「楽しさ」「充実感」（夢中になるので、時間が早く進むとを感じるなど）である。

従って、授業は暗記する素材を教えこむものではない。そういう授業は楽しくない。時に眠いだけである。**楽しい授業とは、学生が自らの頭(体)を使って参加する**、例えば色々な実践的問題を解きつつ、学生たちにとって新たな「知」を創造していく活動である。その新たな「知」は、教員を含む先人にとっては既存の知であるかもしれないが、学ぶ学生にとっては**自ら考え組み立て創造する「知」**なのである。この「知」はほぼ絶対に忘れる事はないし、日常生活に応用され、**新たな知の創造の基盤**にもなっていくであろう。

この「知」の発見の楽しさを学生が味わえるように、仕掛けていくのが教員の仕事である。そのためには、教員も当該の学生に合わせて、色々な仕掛けを考えていかなければならない。

教員が授業を楽しむとは

「学生が参加する授業を創って行く」という「**創造的営み**」が、**教員が授業を楽しむ第一歩**である。教員の楽しみをもう少し整理すると以下になるだろう。

① 自分の成長を実感する

授業内容を考える材料を集めるべく、様々な学習をする過程で、多くを学ぶことができ、新たな発見ができる。

② 学生の反応から学ぶ

学生主体で授業が展開するので、**学生から様々なリアルな反応**が返ってくる。中には、自分では調べ切れなかった点を報告してくる学生もいる。また、教員からの説明の仕方では、理解しがたいという反応もある。どちらからも多くの学びがある。

③ 教員も学生も、自己実現（表現）ができる

A.マズロー(注1)によれば、そもそも人間は自己実現をしたい生き物であるから、それがお互いに素直にできれば、これほど楽しいものはない。特に、学生間でも「仲間から存在を認められる」のは、非常に重要な事である。

④ 未来が拓ける

①については、学生も、アクティブラーニングの授業に参加するために、自分の意見をまとめる必要があるのも、それなりに情報を集めたり考えたりしなければならない。これと③が組み合わされて、**教員も学生も新たな課題を発見する中で、未来への展望が拓けてくる。**

学生も、教員も、共に授業を楽しむとは

学生にとって「授業が楽しいなど」はあり得ない。難行苦行でいいのだ。」と、私に言った幹部教員がいる。「授業は新しい知識を覚えるための苦しい努力を行う場だ」と。しかし、これは明らかに間違いである。**新たな「知」の修得は、基本的に喜ばしく楽しいものである(注2)**。また、楽しくなければ熱心に取り組む気にはなれないので、**授業の実質的な効率も悪くなる**。学生が面白くなさそうにしていれば、教員も授業が楽しくないであ

ろう。逆もまた成り立つ。

授業は基本的に教員がコントロールしていくものだとなれば、この「**楽しくない**」責任は教員にある。教員が楽しい授業を作り出すか（支援してあげるか）どうかにかかっている。同時に、授業は「**学生が学ぶ**」ために行うので、**学生が中心**である。とすれば授業中に如何に**学生が主体的に活動できるように**、教員から仕掛けていくかが課題となる。この方法が、アクティブラーニングである。学生たちが授業中に自ら活動するアクティブラーニングは学習効率が高い（知識修得率も）ことも証明されている（注3）。

授業を楽しめる教員になるために

教員が授業を楽しめるようになるためには、言うまでもなく「**学ばなければ**」ならない。「学ぶ」のは教えるべき分野の内容も重要だが、此处では「**教育方法**」についてもである。そして、学んだ内容を自分で**表層的ではなく深く「考え」て、創造に繋げなければならぬ**。この「考える」ための学びとしては、やはり文献を読むのが良いであろう。刺激を受けるための研修会への参加も良いが、ともすれば聞き流す「**表層的**」な学習になってしまって、それを実践して（失敗も重ねながら）自らの蓄積として発展させ、**教育という（「流れ作業」ではなく）「仕事」に繋げていくには不十分な場合が多い**。文献なら、やってみて疑問が出た時に、そこに**戻って確かめる**ことが可能である。

さらに重要な学びは「**学生（の反応）**」から学ぶことである。この学びは、**反応をどう解釈するかであるから、考えなくては学べない**。そもそもテキストを解説するだけの、流れ作業のような授業なら、学生の反応はあまりないので、考えないであろう。**学生から多くを考えさせられ学べる**というのは、アクティブラーニングの特徴である。

学生と共に未来を創って行く教員

授業を「楽しむ」ためには、何事もそうであるように、それなりの準備が必要である。それをしなければ、楽しめないのは当たり前である。

それでもやっていけるといえるのは、**教員が成績評価を全面的に握ってしまうことで、学生を支配できるからである**。従って、教員はまず**成績判定を学生が自ら行えるように、判定基準をシラバス**

などに掲載することによって、学生に示す（できれば試験問題も）必要がある。特に、専門学校は**職業教育であり、当該業務で仕事ができるという達成課題は明確**なのだから。

また、学生の中にはリスキリング等を目指す、現代社会の発展の中で鍛えられてきた**社会人**も多い。こういう学生とともに、授業を創って行くには、**教員も現代社会に生きる社会人**としての、専門外の学習も重要である。①**未来志向** ②**国際志向** ③**現実（有効性）志向** ④**具体性（実用性）志向**などの観点をも自覚し、狭い専門の教員集団の中に籠ってしまわないで、人間としての広がりを持たないと、「楽しい」授業を展開し、自らも「楽しむ」ことは難しいだろう。

学生から認められる「教員」になろう

最近、教員になりたい若い人はどんどん減っている。楽しくやりがいのある仕事だとは思われていないのであろう。ある意味では、（学校の）教員というのは、苦勞が多い割には**楽しくない（やりがいのない）仕事**とされているのかもしれない。

未来を創って行く教育、社会の基礎作りを任務とする教員は、それゆえにこそ、学びの楽しさを支援できるよう楽しい授業の実践を求められるのである。

「アクティブラーニング授業を考える」

連載終了

「学生も教員も楽しくなるアクティブラーニング授業を考える」の連載は、今号を持って終わりとします。今後も、読者の皆様が様々な文献なども参照されて、「**自ら基本的考え方と実践を結び付ける学び**」を続けられるよう期待しています。私も続けます。質問などあれば、ぜひご連絡ください。ともに学びましょう。

〈職業教育研究開発センター長／川廷 宗之〉

- （注1）アブラハム・マズロー・・・アメリカの心理学者（1908～1970）が考案した、「欲求五段階説」「自己実現理論」はあまりにも有名である。
- （注2）幼い日に、周りの大人に「なんで？」とか「これは何？」とか聞いて教えてもらって、知識や考え方が膨らむのを楽しむ経験を覚えているであろうか。これが学びの原点である。何時しか、自分から学びに行くというよりは、周りから（必ずしも自分が学びたいと思っていない内容を）教え込まれることに慣れてしまって、「学ぶ喜び」「知的な発展を楽しむ」ことを多くの人は忘れてしまっている。
- （注3）D.W. ジョンソン他著・関田訳「学生参加型の大学授業」pp.42-68 玉川大学出版会 など

報告

第19回 公開研究会 開催報告（2022年10月1日）

様々な状況に置かれた女性の幸せの実現に向けて ～教育界、産業界、社会が、今できること～

本公開研究会では、様々な立場に置かれた女性が人生を楽しむために、「学ぶこと」と「働くこと」の視点から、教育界・産業界・社会の課題や取り組みを振り返り、今後の展望と具体的な取り組みについて議論しました。



第一部 基調講演

『女性が産業界における様々な障害を乗り越えて
どのようにキャリア開発をしていくか』

小野塚 邦子 氏

【キリンアンドコミュニケーションズ

株式会社 元代表取締役社長/
大妻女子大学 大妻マネジメント
アカデミー 講師】



小野塚氏の基調講演では、日本における女性の就業状況の歴史的背景から、日本社会における女性活躍推進施策の変遷をご紹介いただき、キリンビールにおけるご自身の経歴と、具体的な施策の変遷を関連付けてご説明いただきました。小野塚氏は、業界初、キリンビール初的女性転勤営業として仕事をスタートされ、管理職や採用責任者、グループ企業の経営者として活躍されました。

ご自身のこれまでのライフスタイルや企業での様々なご経験を踏まえ、女性活躍推進のためには、「社会の変化に応じて、自社の課題を整理・明確化すること」、「経営層の確固たるトップダウンの経営戦略と同時に、女性社員が主体となって声をあげるボトムアップの取り組みが重要であること」、そして、その具体的な取り組みとこれからの日本社会における女性活躍推進に向けての課題について、お話しいただきました。

第二部 ディスカッション

『女性が「学ぶ」「働く」ために、教育界、産業界、
社会は何ができるのか』

第二部では、日本児童教育専門学校副校長の阿久津 摂氏を司会に、全国的に認可保育園と障害児施設等を運営されている社会福祉法人どろんこ会 理事長の安永愛香氏、サイボウズ株式会社 社長室の渡辺清

美氏を討論者として、『女性が「学ぶ」「働く」ために、教育界、産業界、社会は何ができるのか』について、ディスカッションを行いました。

まず、討論者から、自己紹介ならびに現在の課題意識についてお話しいただきました。

はじめに、安永氏から、様々な抵抗や困難を乗り越えてどろんこ会を立ち上げた経緯や、現在に至るまでの取り組みについて、また、少子高齢化時代を迎え、上司は外国人、部下は高齢者など、多様な人々と働くことが当たり前になる社会を想定し、異年齢や障害児も共に過ごすインクルーシブ保育を行うなど、子どもの「生きる力」を育む保育の実現に向けた取り組みについて、ご紹介いただきました。



次に、渡辺氏から、ご自身関わっているNPOや一般社団法人が行っている興味深い取り組みのご紹介と、「チームワークあふれる社会を作る」という企業理念のもと、「100人いれば100通りの人事制度があってよい」といった社員全員が働きやすい人事制度の方針を掲げているサイボウズ株式会社における、多様化した社会の中での、事業や施策、取り組みについて、ご紹介いただきました。



最後に、司会の阿久津氏から、ご自身の仕事や教育活動など、現在に至るまでの経験や転機とそれに伴う周囲との関わり、その中で抱いた問題意識についてお話しいただきました。そして、社会の課題に直面したことによって社会福祉学を学ぶことに至った経験と、その想いについてもお話しいただきました。



続いて、ワークライフバランスについて、それぞれの立場からの課題認識とその解決に向けた取り組みについて、議論が行われました。

まず、安永氏から、どんな職種の「保護者」でもサポートしたいという想い、一方でその想いを実現するためには「保育士」の負担が重くなってしまうことへの葛藤があること、その問題に対して、紙の連絡帳を廃止してアプリを導入し、IT化を進めていることなど、「保育士」への具体的な支援施策を例に、どろんこ会の「保護者支援＋保育士負担軽減」の取り組みをご紹介いただきました。

次に、渡辺氏に、サイボウズ株式会社におけるワークライフバランスの取り組みと、ご自身のライフイベントを関連付けながら、働き方の多様化についてお話いただきました。同社では、「働く」の前にまず「生きる」がある、「生きる」の後に「働くがある」、という方針を大切にしていることをご紹介いただきました。

最後に、阿久津氏に、日本児童教育専門学校におけるwork・learn・lifeバランスに向けた取り組みについて、授業時間の柔軟化、学費分納制度の導入、奨学金・修学資金などの活用サポートといった取り組みについて、ご紹介いただきました。

最後には、女性が人生を楽しんでいくために、まずは「こうしたいという想いを持つ・声をあげてみる、考えを周りの人に伝えてみる」ことから始めることで「周りを巻き込んでいく」とともに、経営者

やリーダーの意識を変えていくことが必要であることが確認されました。

本公開研究会では、本誌ではご紹介しきれない取り組みや登壇者の熱い想いが盛りだくさんに語られています。当日ご参加いただけなかった方は、是非、アーカイブ配信にてご覧ください！

第19回公開研究会の
アーカイブ配信を再公開します！

お申込は
1月末まで！

視聴料金 **1,000円**

お申込は
こちらから！

一般の方はお申込みいただいたメールアドレスに、ご入金方法などお送りいたします。(敬心学園教職員、職業教育研究開発センター会員及び研究員は無料です)



次回、第21回公開研究会につきましては、職業教育研究開発センターのホームページ・Facebookにてお知らせいたします。どうぞ、ご確認ください。
(職業教育研究開発センター)

お知らせ

ダイバーシティ・マイスター養成講座 ホームページ開設！



2019-2021年度、文部科学省の委託事業として研究開発に取り組んだ「介護・保育分野における異文化間異世代間の交流促進のための分野横断型リカレント教育プログラムの開発」事業において開発した教育プログラム・eラーニング教材/ワークブック等のコンテンツをご紹介するホームページが出来ました！

今後、広く介護・保育業界で活用していただけるよう、普及啓発に取り組んでいきます。介護・保育系専門学校の卒業教育にもぜひご活用ください！

ダイバーシティ・マイスター養成講座

～文化・世代の壁を乗り越えて、生き生きと働くために～

介護・保育分野で働く専門職のための スキルアップ講座

HPはこちらを
チェック！



外国人スタッフとの
コミュニケーション



子どもと
高齢者の交流



お知らせ

2つの研究事業..社会実装化へ ～令和4年度文部科学省委託事業
 成果報告会 開催案内～

2022年度 文部科学省委託事業
「専修学校における先端技術利活用実証研究」
成果報告会 ～最終章 新たなるチャレンジへ～
日時:2023年2月3日(金) 10:00-12:00 <VR・第4研究班>

ワコム貸会議室 高田馬場 および Zoomによるオンライン 同時開催
☒ 開催形式: 対面(先着30名) + Zoomによるオンライン配信
 (Zoom参加の場合は、会場で実施している模様を視聴いただきます)

☒ 参加: 無料

☒ 申込方法:
 参加者氏名、所属(職業)、E-mail、出席
 方法(会場 or オンライン)をメール本文に
 入力の上 m.watanabe@keishin-group.jp
 宛に送信してください。

☒ 申込締切:
2023年1月27日(金)

【プログラム】

9:30 受付開始
 10:00 開会あいさつ 学校法人敬心学園 理事長 小林 光俊
 10:20 本年度の事業内容・成果報告
 10:40 基調講演「アジア新興国における病院経営×DX からみえる
 一歩先を行く教育への期待」
 北原グループ(株式会社KMSI、医療法人社団KNI、NPO法人 日本医療
 開発機構) 取締役/理学療法士 亀田 佳一 様
 11:00 座談会「先端技術×職業教育」
 11:50 新たなるチャレンジへの思い
 事業代表者 川延 宗之/事業責任者 小林 英一
 12:00 終了

昨年度に続き第2弾座談会を開催！
 今回のテーマは、「**先端技術×職業教育**」と題し、
 リハビリ業界で活躍されている先駆者と先駆的取り
 組みをしているリハビリ分野の専門学校の教員を招
 き、未来の職業教育について語っていただきます。

先端技術

職業教育

成果報告会 + 座談会

2022年度 文部科学省 委託事業
【DX等成長分野を中心とした就職・転職支援のためのリカレント教育推進事業】

 ～テクノロジーを活用して介護DXを進める、現場実践能力の高い介護職の効果的な
 養成プログラム開発及びその就職・転職に関する有効性を確認する実証研究～

日時:2023年2月24日(金) 10:00-12:00 (Zoom開催)

<DX・第13研究班>

座談会を開催します！座談会では、「福祉 × DX × 教育」、
 それぞれの業界で活躍されている先駆的な専門家とともに、
 「DXを活用して人材不足を乗り越える福祉の未来」をテーマ
 に、議論します！



↑プログラムHP

☒ 開催形式: zoomによるオンライン配信

☒ 参加費: 無料

☒ 申込方法:
 参加する方のご氏名、ご所属(職業)、メー
 ルアドレスを、メール本文にご入力の上
kaicare@keishin-group.jpまでお送りください。

☒ 申込締切:
2023年2月22日(水) 正午

【プログラム】(予定)

9:50 受付開始
 10:00 開会あいさつ
 10:20 本年度の事業内容・成果報告
 11:00 座談会「DXを活用して人材不足を乗り越える福祉の未来」
 11:50 閉会挨拶
 12:00 終了

【DX福祉職養成プログラムとは】

本事業で開発した「DX福祉職養成プログラム」は、受講者が培ってきた「スキル」や「経験」を活かし
 て福祉職に就職・転職できるよう、初任者研修・スマート介護士・オリジナル実践教育プログラム・就職
 サポートを組み合わせ、福祉の専門的な知識や技術に加え、ファシリテート力やリーダーシップ力、
 ICTやロボットを実践活用できる、即戦力「DX福祉職」を養成するプログラムとなっています。

 初任者研修
 130時間
 (通信・通学)

 スマート
 介護士
 15時間
 (オンライン)

産学連携

就職
サポート実践教育
プログラム
60時間

オリジナルで開発

報告

敬心学園 第19回職業教育研究集会（旧学術研究会）開催報告

職業教育におけるコンピテンシー

（職業上の成果につながる能力）の形成

～ディプロマポリシーとの関連や評価のあり方もふまえて～

オンライン開催3年目となる 第19回職業教育研究集会を10月22日（土）に実施しました。敬心学園小林光俊理事長より挨拶の後、以下の分科会での口演発表、そして上述の「職業教育におけるコンピテンシー…」をテーマに、シンポジウムをオンラインで開催。川廷委員長の総括で閉会しました。当日は、全国からの口演発表・140名の視聴・シンポジウムでは北海道・千葉・東京・沖縄から登壇いただきました。読者の皆さんも次年度はぜひ発表をご検討ください。

※シンポジウムのスライド（一部追加含む★）は、敬心・研究ジャーナル第6巻第2号（2022.12月末発行）に掲載しています。



分科会

学園内の教職員・職業教育研究開発センターの客員研究員計30人による15演題の口演発表が行われました。座長と各校の運営委員がタイトルを設定・運営し、組織をこえた分科会が実施されました。

“考える”を促す学修支援を考える

座長：稲垣 元 先生（日本医学柔整鍼灸専門学校）

社会人向けジェネラリスト資格養成に求められる教育
—高学歴・高キャリア層に合わせた戦略の可能性—

片桐 正善 日本福祉教育専門学校

ラーニングマネジメントシステム（LMS）が与える

学力への影響 —国試合格率向上に向けて—

川上 英史 日本医学柔整鍼灸専門学校

国家資格合格後の免許申請指導における調査

—新資格者へのフォロー—

住吉 泰之 日本医学柔整鍼灸専門学校

実践の現場をめぐる力学 —伝統・情報・期待—

座長：黒木 豊域 先生（日本福祉教育専門学校）

青年前期のフリースクールにおける「生成的な」評価

—運動と事業のあいだで—

大山 貴史 NPO法人文化学習協同ネットワーク

鍼灸師として働いていく上で身につけておきたいことを
考える上での資料調査 —職業情報提供サイト（日本版
O-NET）について—

天野 陽介 日本医学柔整鍼灸専門学校

若者自立塾事業の再検討 —支援のミスマッチの背景を
さぐる—

檜垣 昌也 聖徳大学短期大学部

リハ・ケア分野の多重のケアを考える

座長：田中 克一 先生（日本リハビリテーション専門学校）

日本のダブルケア・多重ケア研究の動向と到達点

—家族介護者支援の重要性と家族の変化から—

河本 秀樹 職業教育研究開発センター客員研究員

脳血管障害者のQOL評価にはスピリチュアリティを捉える
項目が含まれているか

坂本 俊夫 東京保健医療専門職大学

精神科作業療法における作業に根ざした実践の介入戦略の
質的解明

山下 高介¹⁾・京極 真²⁾ 日本リハビリ
テーション専門学校¹⁾ 吉備国際大学大学院²⁾

臨床と教育現場における保健福祉領域の実態調査

座長：五嶋 裕子 先生（東京保健医療専門職大学）

介護福祉職の新型コロナウイルス感染症対策に関する
調査研究報告

松永 繁 岩手県立大学

新型コロナウイルス蔓延下における大学生の主観的運動量
増加と精神的健康度との関連から、学生への助言の
在り方を考える

富田 義人・加藤 剛平・重國 宏次・有本 邦洋・

五嶋 裕子・森本 晃司 東京保健医療専門職大学

「保育者養成校における学生による保育記録の質の向上に
関する実践的な研究」—今日求められる実習記録の教育
実践・理論・歴史の観点から—

小澤 由理¹⁾・水引 貴子¹⁾ 熊田 凡子²⁾ 日本児童教育
専門学校¹⁾ 職業教育研究開発センター客員研究員²⁾

その先の専門的職業人を創る

座長：鈴木 八重子 先生（日本児童教育専門学校）

園生活における幼児のロコモーションに及ぼす園環境の
影響

菊池 一英 日本児童教育専門学校

医療系専門職大学の教育的特徴の何がOT/PTを目指す
学生の成長に影響を与えるのか

小野寺 哲夫・畠山 久司・大塚 幸永・武井 圭一・

森本 晃司・江幡 真史 東京保健医療専門職大学

鍼が顔面の皮膚に与える影響の研究2

遠藤 久美子・山本 真吾・大江 直美・天野 陽介

日本医学柔整鍼灸専門学校

シンポジウム

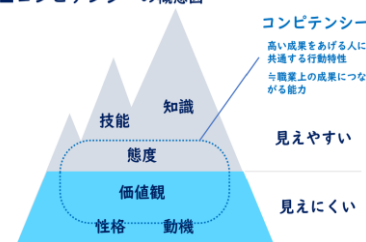
コンピテンシー…「職業上の成果につながる能力」

このシンポジウムでは

■コンピテンシーの概念図

「コンピテンシー」をどう
捉えて進めるのか、イント
ロダクションとして、岸本
光正コーディネーター（敬心
学園事業推進支援部部長 兼

日本医学柔整鍼灸専門学校
副校長）による目線合わせから、第1部では『コンピ
テンシーを身につけるための方法や取組み』として、4事
例の発表が行われました。



① 知識・コンピテンシーとスキルの違い
コンピテンシー: 「能力や技能を発揮する力」 スキル: 「能力・技能そのもの」

- 1) 沖縄福祉保育専門学校 事務長 江川 毅 氏・
総務課 東江 裕一 氏
- 2) 千葉商科大学人間社会学部 教授 和田 義人 氏
- 3) 学校法人西野学園 理事長 前鼻 英蔵 氏
- 4) 日本医学柔整鍼灸専門学校 鍼灸学科教員 中村 幹佑 氏

1) “待つ保育”「社会人基礎力」来年度からは新カリキュラムとしての導入も予定

「コンピテンシーと似た言葉である“社会人基礎力”を重視・取り組む本校で、私たち二人の見解を发表します」と前置きし、経産省の『「人生100年時代の社会人基礎力」について』をもとに、その重要性・課題感からの取り組み事例を发表されました。

ディプロマポリシーでは「ちむがなさの想い(※)を身に付けた専門職として、子どもから高齢者とすべての人々の暮らし・福祉社会の発展に寄与できる人材の育成」を掲げていますが、保育現場の声を聞くと、ニーズとのズレやギャップがあります。

そこで、本校ではこども未来学科においてこどもが主体の保育

“待つ保育”を実践しています。こどもが自分で発見すること等を目指し科目の中で、“こどもが考え・決め・答える”

を待つことの大切さを学ぶのです。

同学科では、来年度カリキュラム改正を行い「社会人基礎力」科目設置に向けて詳細検討を進めている、ディプロマポリシーの見直しも検討中です。他の事例はスライド(★)をご覧ください、と結ばれました。

(※)真心をこめた愛情

2) ジグソーパズル型からレゴ型

ability (アビリティ) と competence (コンピテンス)

「コンピテンシーは普遍的か、新たに変わっていく(べきこと)か、問題提示する、という視点で見てください。また“Z世代”(これからからの社会のセンターに入る世代)のものの考え方を大切にしなければいけない、という文

脈で話をします」と前置きし発表されました。

最初のキーワードはAL(アクティブラーニング)。これ迄の教育は“ジグソーパズル型”で、答えが決まっているものを組みあげていく。これを自ら組み立てていく、“レゴ型”への転換と文科省も言っています。組み立て方や答えは無限大です。自ら学び新たな概念・専門性をつくり、社会に実装していくことで、社会は変わります。

右図は“ラーニングピラミッド”。受動型学習も大切ですが、能動的学修(AL)を組み込むことで、学修定着率が大きく上がります。

担当学部では、クロスした部分(右下図)を専門に学びますが、社会での活躍を考えると、それだけではバランスが悪い。スマホでキーワード検索すればその答え

は出てきますが、左右にある多くの切り口での学びには行きつきません。社会での幅広い活躍には、幅広い学びが重要です。

次に新たな武器 DX。

“X”ですから全く違うものに変える、ですが、

言い続ければ社会が変わるわけではありません。

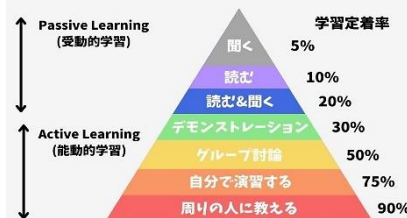
自ら組織をチームを変えていく(OX)、自ら学ぶ姿勢で変容・成長する(PX)、それを実践するためALが大切になってくるのです。

最後に能力という視点。abilityとcompetence。前者は練習すれば身につくことですが、これから必要な能力は後者、環境が変化する中で自ら変わっていける能力、私は“環境変化対処能力”と定義づけます。両輪をバランスよく、自ら回転、前進し、結果として専門性をもった活躍をしていくロードマップを一緒につくれたら良いと思う、と結ばれました。

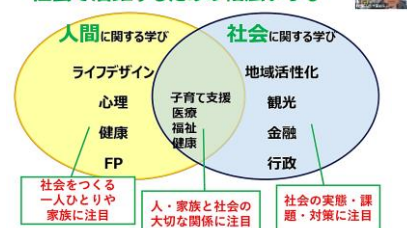
3) ディプロマポリシー (DP) とコンピテンシーは鶏と卵の関係

「20年間学内で言い続けた“北関東以北で一番教育レベルの高い学園に。皆さんにはそれが出来るはずです”。そのためにいつも話してる事をお伝えします。」と発表を開始されました。

最初に結論として、ディプロマポリシー(以下DP)とコンピテンシーは鶏と卵の関係、教育側と職業人側が同一方向性にあることが重要。“教育の公平性の担保(平等ではない)”が必要であり、CP・APを含め内容を推進するカリキュラムマネジメントや教員の養成プログラム確



社会で活躍するための幅広い学び



<新たな“武器”となるキーワード>

DX (デジタル・トランスフォーメーション)、
OX (オーガニゼーション・トランスフォーメーション)、
PX (パーソナル・トランスフォーメーション)、
AL (アクティブラーニング<“やってみる”学び>)、
Z世代

沖縄福祉保育専門学校での取り組み紹介

こども未来学科「待つ保育」

こどもが自分で考える環境構成って何？
こどもが自分で発見する
見つけた喜びが「やりたい気持ち」に
つながるようにあそびに込める、ワクワクする
こども主体の保育者。
こどもが感じる世界を大切に、
心豊かな保育者の育成を目指しています。

経済産業省の提示する「社会人基礎力」

- ・前に踏み出す力 (アクション)
- ・考え抜く力 (シンキング)
- ・チームで働く力 (チームワーク)

科目：保育者論【一緒に乗りたいな・・・】ワーク

綱跳びで作った電車で、一緒に乗りたい男の子・でも綱の長さが原因で入れない・・・どう声をかけますか？

→電車ごっこをしている友だちに「みんなで乗るにはどんな方法があるかな？」と保育士。

→子ども達はしばらく考え「綱跳びを2本にしておきくすればいい！！」と言ってみんなで乗れた。

※保育士が、「みんなで仲良く乗ろうよ！！」「交代で乗ったらい」と答えを出すのは簡単。子ども達に問題を投げかけて待ち、子どもたちから「答え」を創ることが大切。

科目：環境論【できる？できない？】事例

海遊びの日に台風接近の情報・・・今日の天気と比べると大ブレイク。どんな対応があるかな？

→子ども達の楽しみにしていた海遊びの決行判断を子ども達に任せる。実際にバスで現地へ移動。

→子ども達は、天気(空の色)や海、海を見て、判断するしかないという判断。「また別の日に作戦しよう」と帰った。

※楽しみにしていた活動だけあって保育士の言葉だけでは納得できず、子ども達にどうするか実際に現地に行つて決めてもらう事になる。「自分の目で見る」「自分で決める」こと子ども達は納得してくれた。子どもが出す答えを待つ。

立も重要。“医療人ではあるが、教員でないものを教員にする”この両輪あつての養成施設と考え、命題にしていると話されました。

DPとコンピテンシーの関係

性では、卒業時の仕上がり像と就職先が求めるものの差違について専門学校で議論がない。各業界もコンピテンシー定義を示す像、標準系もないこと等、クリアしたい点を提示され、学園の取り組みではまず、定義づけの推進ができる教員を育てることに軸足を置きます」と前置され、具体的な動きを話されました。

そして最後に、「結局人づくり」

と、本年度改称した「教学マネジメント室」における打ち手を具体的に話された後、

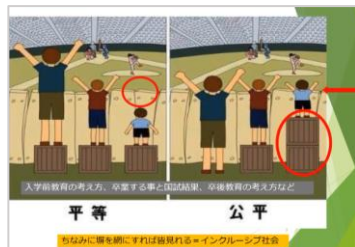
“こういった議論の場を全国レベルに発展させることが専門学校全体の底上げになると確信している”、と話を結ばれました。

4) 知識偏重にしない態度教育

見えにくい能力を可視化する「ループリック評価」

はじめにDP・評価、そしてコンピテンシーの関係を整理され、重要なのは“教育内容を考える前に、クリアすべき課題を考えること”と前置され、学科のDPを提示(右図参照)。

カリキュラムは国家資格取得を目指すものも多く、教育の自由度は高くないですが態度教育も大切と、その取り組みを話されました。そして学科DP内の“倫理観、問題発見、探求心”等がコンピテンシーに近いと考え、これらは見えづらく評価が難しいものでしたが、態度教育の可視化へ取り組み、ループリック評価表の導入(観点×尺度で計る)で具体的に足りないことがわかるようになります。評価表を実際に使用する臨床実習(教員がつき、一般患者に施術する、限りなく現場に近い実習)では、知識・技術のみならず、様々



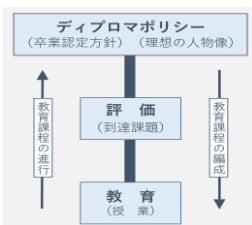
③西野学園でのディプロマポリシーまでの取り組み

- ▶ 入学前から卒業までの流れ:「わかる授業」の推進
 1. 入学前教育の実施: 通信学習と事前講習
 2. 入学後、その際の実績上位者に対するフォロー、学習習慣の維持
 3. シラバス・コマシラバスの提示、確認テスト・公開授業の実施
 成績評価はこの中からの項目を提示、数値化できないものを評価軸にしない
- ▶ 『できる』シートの作成
 1. 全実習科目で作成。何が出来るか、出来ないのかを明確にする
- ▶ 業界とのつながりによるフィードバック
 1. 同窓会や卒業生とのつながりからのフィードバック
 2. 就職先からの実習先・就職先からのフィードバック
- ▶ これら全体をカリキュラムマネジメントの範囲。
- ▶ 以上の事を踏まえ、求める人物像を確認し、ディプロマポリシーのブラッシュアップを継続的にを行い、カリキュラムマップの再構築につなげる (CP改訂)。

最後に、課題として

- ▶ 結局人づくり、以上を司る部署として、以前「FD・SD推進室」を今年度から「教学マネジメント室」と改称。①教学スーパーバイザー ②メンター制度 ③担任学ゼミを行う。今後、「西野学園カリキュラムマネジメントの手引き」「担任ハンドブック(実践事例集)」を作成する。
- ▶ 入学時と卒業時との変化と学習成果(学修成果)をどう考えるか。高校までの学習指導要領の改訂と国家試験レベルとの差
- ▶ 非認知能力の育成という観点: 幼児教育からの教育の連続性
- ▶ 教員個々がディプロマポリシーとコンピテンシーを意識しているか
- ▶ 成果の指標化として卒業生IR調査を実施し、教育内容の評価・改善につなげたい
- ▶ このような議論の場を、各都道府県レベル、全国レベルに発展させることが専門学校業界全体の底上げにつながり、信頼感の醸成になる。

資格取得予備校的専門学校からの脱却



	優 (3点)	良 (2点)	可 (1点)	不可 (0点)
対応力	自ら課題を解決し、積極的に取り組む。	課題を解決し、積極的に取り組む。	課題を解決し、積極的に取り組む。	課題を解決し、積極的に取り組む。
問題発見・解決力	自ら課題を発見し、積極的に解決する。	課題を発見し、積極的に解決する。	課題を発見し、積極的に解決する。	課題を発見し、積極的に解決する。
倫理観	他人の権利や自由を尊重し、社会的責任を自覚する。	他人の権利や自由を尊重し、社会的責任を自覚する。	他人の権利や自由を尊重し、社会的責任を自覚する。	他人の権利や自由を尊重し、社会的責任を自覚する。

イメージ ↑ 11

な能力が必要ですが、パフォーマンスを数値化でき、振り返りも安易になります。ただし観点が重要です(観点になれば可視化できない)。これは実際に使用する項目表の一部にDPを紐づけしたものです。学生は各項目を4点満点で実習前後に自己評価します。事後数値が下がっても、必ずしも悪いわけではなく内省になると考えます、と活用事例を話されました。

大項目	小項目
態度	身だしなみ
	健康管理
	時間管理
	施設内
	受療者
コンプライアンス	主体性
	守秘義務
コミュニケーション	個人情報
	協調性・行動力
	指導への対応
付帯業務	報告・連絡・相談
	清潔保持
	衛生管理
	予診表の説明

文部科学省の委託事業として(株)三菱総合研究所が作成

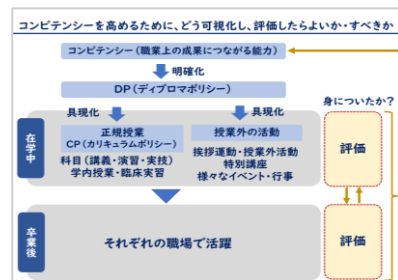
- 鍼灸学科ディプロマポリシー (卒業認定方針)
- 【知識】
1. 高い倫理観と倫理観を身に付けている。
 2. 鍼灸師としての専門知識を身に付けている。
 3. 診療を取り巻く環境の変化を踏まえた診療への対応と知識を身に付けている。
- 【技能】
1. エビデンスに基づいた診断、処置、治療に必要な技能を身に付けている。
 2. 伝統的療法の習得と最新の技術・療法、両方に必要な技能を身に付けている。
 3. 自ら問題を発見、課題を設定し、その解決のための実践力を身に付けている。
 4. 人々の多様なニーズに適切に対応できる専門技能を身に付けている。
- 【態度】
1. 他者の心を理解し、他者のために行動できる。
 2. 探求心を持って自己研鑽に努めることができる。
 3. 多様な環境下でローレベルに活動することができる。
 4. 生活のために必要な技能を自ら身に付けることができる。

最後にこれらをどう教育に落とし込むか。結果を元に学生全体の苦手・水準を見て教育課程を見直します。学習到達度も把握できますが、学校としての教育目標と評価項目の紐づけ・見直しをし、教育への落とし込みを議論していきたいと結ばれました。

コンピテンシーを高めるために、どう可視化し、評価したらよいか・すべきか

“コンピテンシー”を定義づけ、DP/日常の教学活動への落とし込みが必要ですが、それが高められたかの評価が必要です。学生、学科・学校など組織、卒業生、就職先、各視点での評価がありますが、どう評価していくべきかという問いかけから第2部を行ないました。

登壇者複数(専門学校各校)からのご意見が“就職先の声”でした。現場で必要な力が身についているか、評価項目は正しいのか、卒業生の状況や業界の



状況等生の声を聞きDPへフィードバックする、授業への落としこみにも繋げるなどでした。“授業とは別観点での学生自身の自己評価の実施”“専門学校は職業直結、地に足をつけキャリアアップする卒業生も多い、やめない共通点を見出すことも大切”などの話もありました。和田氏は「今後こういった話の実効性を高めるには、受け皿(就職先)の方たちがどう受け止め評価されているか、ミキシングできると良い」と助言。

最後に、学生・教員・就職先の評価の連動が、今後の職業教育のあり方の軸になる、と岸本コーディネーターのコメントでシンポジウムは締めくくられました。

上段左から
・前鼻氏・和田氏
・中村氏
下段左から
・岸本氏
・江川氏・東江氏



**募集・
ご案内**
「敬心・研究ジャーナル」第7巻第1号（2023.6月末発行）
投稿原稿募集、研究倫理審査のご案内
【投稿：入稿関連スケジュール】

全投稿原稿（タイトル：題目など）エントリー締め切り……2月10日（金）

＊原稿エントリー時に、投稿原稿チェックリストをお送りください。

査読あり原稿入稿締め切り……3月10日（金）

査読なし原稿入稿締め切り……5月10日（水）

＊査読依頼が可能なカテゴリーは、投稿要領や投稿原稿チェックリストでご確認ください。

【投稿カテゴリー】「総説」、「原著論文」、「研究ノート」、「症例・事例報告/症例・事例研究」、「実践報告/実践研究」、「評論」、「主催するシンポジウム、研究会などの成果報告」

【投稿先】 職業教育研究開発センター「敬心・研究ジャーナル」事務局 ✉ journal@keishin-group.jp

【投稿資格】 原則として敬心学園の教職員、職業教育研究開発センター研究員（編集規程より抜粋）

＊研究員登録は、以下よりお願いします。

RDIセンターヘメール ✉ vetr-di-kensyu@keishin-group.jp

RDIセンターHP http://www.keishin-group.jp/keishin_fr/rdi/

＊投稿に関する詳細は「編集規程」「投稿受領から掲載までのフローチャート」「投稿要領」「執筆要領」をご確認いただき、投稿原稿チェックリストを使用しエントリーしてください。

バックナンバーや書類・様式はこちら

研究員登録


人を対象とした調査研究を実施する場合、研究倫理審査の承認が必要となります

「敬心・研究ジャーナル」への投稿や、「学校法人敬心学園 職業教育研究集会の分科会」などで発表される **人を対象とした調査研究**は、研究開始前に所属される学会・組織、当センターなどで研究倫理審査を済ませてください。

＊当センターの設置する「研究倫理専門委員会」による倫理審査を受けることが可能です。

「研究倫理専門委員会」は偶数月（4、6、8、10、12、2月）に開催しています。

審査をご希望の方は偶数月10日までに、様式1（研究計画等審査申請書）および様式2（研究に関する事前チェックシート）に加え、様式1でチェックした添付資料とあわせて、下記までメールにてお送りください。（様式など、右上のQRコードからご確認ください）

申請書提出宛先 ✉ journal@keishin-group.jp

※ 審議案件や検討案件が該当月の10日時点で発生していない場合は、その月の委員会は開催いたしません。


次号告知（2023年4月15日発行予定）

■特集 RDIセンター研究班

2022年度活動実績報告（仮）

■連載 研究の仲間から最新の動向を学ぼう

■報告 第20回公開研究会開催報告

ほか

読者の皆様の声を聴かせてください！


読者アンケートへの回答は
こちらからお願いします



＊いただいたご意見・ご感想には原則としてお返事はいたしません。ご容赦ください。